

卒業生は今



2005年10月11日、ICUの素敵なAlumni House 2階のloungeにて、アジア文化研究所主催の演奏会と公開講座を担当するために、大きな喜びとともに母校を訪れました。私はドイツ系アメリカ人ですが、この公開講座では、和楽器の尺八と箏を使ってインド古典音楽を奏で、日本語の短歌や俳句をインドの声楽として歌うなど、バングラデシュから来たタブラー（太鼓）奏者と一緒になって演奏させて頂きました。こうした国際化時代を反映するさまざまな交流は、私にとってはごく日常的な活動となっています。とくに”Play music”というような、「遊び心での音楽」演奏をするようになった背景には、私自身がこれまで50年間、「音」との深い結びつきがあったからだと言えるでしょう。

西洋出身で、結婚相手は日本人、音楽の最大の恩師はインド人と、故郷が3カ国ともいえる私の現状は別に「珍しい」わけではありません。これこそが「21世紀だ」と感じるのです。母校と言うと米国の大学、日本のICU、インドの音楽大学、スリランカの大学院そして再び米国の大学院で学術や国際的生活ともいうものを学びました。そしてそれぞれの国々での音楽の先生は、米国（ピアノ）、日本（尺八）、インド（古典音楽他）、インドネシア（ガムラン）などですが、お世話になったそれぞれの先生に対し、私は自分の深い感謝の気持ちをどうやらうまく表現できるだろうかと考える今日この頃です。それには、諸先輩から学んだことを、自分の専門分野の中でさらに腕を磨き、数々の貴重な体験を活用して次の世代に伝えていく他にはないのではないかと思います。人間の貴重な創作とも言える音分化（主に言葉と音楽における音）を学びながらさまざまな経験を積んでいるうちに、「音楽の仕事」自体が大変神聖なものに思えてきました。それは「音は神である」というインド文化の中に、公用語のヒンディー語で「Kaam bhii puuja hai（仕事こそ祈りである）」という諺がありますが、その諺は「仕事に対して忠実に責任を果たす姿」として知られ

ている日本人の存在と通じているものがあります。また「礼拝を通じて信仰深い国民で知られている」インド人に通じるものなど、私を迎え入れてくれた日本とインドのそれぞれの本質を見事に表現しているのではないかと思います。

ICUを卒業後、私は何度か大学に舞い戻って来る機会を与えられたことがあります。10年前は、ディッフェンドルファー記念館にて、ICU音楽専攻の後輩と二人でインド音楽を演奏し、また2004年には日本語教育研究センターの「夏期日本語教育プログラム」の一環として留学生たちに文化講演会「音文化としてアジアの言葉と音楽」を担当させて頂いたこともあります。この経験は、三十年前の自分の学生時代や青春時代をなつかしく回顧する機会であったとともに、恩師たちから学んだ知識やこれまで追求してきた芸術や学問などを、今の若い世代の国際人と分かち合ういい機会となりました。

最近では、三鷹市芸術文化センターで開催された企画で来日したインド音楽演奏家と一緒に公演をしましたが、その企画の担当者もやはりICUの後輩であり、会場で再会できた友人たちも大学時代からの友人が多かったのです。また去年は、四十年前に学んだ懐かしい母校 米国ペンシルベニア州ヨーク市の高校で演奏し、和楽器とインド楽器を紹介するという嬉しい仕事がありました。舞台から観客のさまざまな国籍からなる顔を見ると、その昔は学生と言え、ほとんどがドイツ・オランダ・イギリス系の学生でしたから、今では学校の環境は大きく様変わりしています。まるで「世界が故郷にやって来た」ようで、時の流れと変化の中で母校の大きな環境の変貌を感じたものでした。

私の人生に幸せや豊かさをもたらしたICUでの学生時代の3年間は、結局、母国である米国と恩師の国となった「音文化の大国」インドとの掛け橋にもなったわけですが、それは自分の人生にとってどのくらい大きな意味をもっているのか、年がたつにつれて益々強く実感できるようになってきています。米国のサン・ディエゴの州立大学から転入したICUでの授業初日には、日本語教育プログラムのIntensive Japaneseを体験し、その難しさに「しまったなあ！」とも思いましたが、中国人、ヨーロッパ人、オーストラリア人の同級生と一緒に先生の丁寧な指導を受けながら、数々の謎に包まれているようにさえ感じた日本語と必死に取り組んでいったものです。そして日本語による専門科目などを本格的に受講するようになり、だんだん自信が湧いてくると、それから先の未知の世界に挑戦することを楽しみにするようになりました。

三半（350cc）のオートバイに乗って、神奈川県から通学しましたが、半年後には学生課の紹介で英語を学んでいた日赤病院の医師のアパートに下宿するようになりました。「お（御）」の接頭語で敬意を示すと知ったばかりで、初日から「お」の使い方をめぐって誤解が続き、何回も「お前」と呼びかけては相手をびっくりさせていました。こうした小さな失敗の積み重ねの経験によってだんだん上達していくということは、日本やインドでの言葉の習得や音楽の習得でも全く同じだということを感じました。そしてさらにこうした姿勢を育ててくれるのは国際的な生活環境の中での勉学が大事だと思います。単一民族国家とよく言われる日本ですが、ICUではさまざまな世界との接触が身近にあった感じがしました。多民族国家のアメリカ合衆国での23年間、そしてICUでの大学生活、そして卒業後5年間の留学先となった、民族・言語・信仰など世界一複雑な国インド、またその後はハワイにある米国・国立東西研究所East-West Centerとハワイ大学院にてアジア・太平洋の音楽文化を勉強しながら学生宿舎に30数ヶ国の研究生や研究員と共同生活を送った大学院時代など恵まれた国際的環境の中で過ごすことができ、こうした機会に恵まれたことをうれしく思っています。私の考えでは「God, Guru, Gharwalli」（後者ヒンディー語）、つまり「神、師、妻」という

自分にとっての三位一体の存在が最も大きなものです。要は「魂、頭、心」によって支えられ、初めて整った環境下で勉強も仕事も娯楽も出来ると思えたのです。

余談ですが、国際的環境と言えば、現在の住まいである西群馬の山々に囲まれた下仁田町は、世界の流れから極端に離れている環境のように見えますが、この地を基点にしながらも年に数回は、演奏や研究のため海外に行っているのです。地球から宇宙へ往復する宇宙飛行士の経験と多少は似ているのかも知れません。

日本の伝統音楽に対する理解と経験を追求することが、元々の留学の目的であったのですが、来日後、ICUでお世話になった音楽の金澤正剛先生（現在は日本音楽学会会長、ICU名誉教授）を通じて、尺八の人間国宝であった故山口五郎師を紹介して頂き、稽古を開始しました。心の落ち着く和室で、性格の優しい山口先生のもとで、その代表的な和楽器を手に稽古を始め、歌舞伎や文楽の舞台など東京周辺の邦楽演奏会や稽古場を廻って、私が求めていた日本の音楽文化と親しむ道に邁進していきました。しかしながら、明治以降の日本は、西洋文化に追随していくばかりで、自分が想像していた伝統文化は日本社会のなかには希薄で、別世界という印象が段々強くなり、日本は国際化というよりも西洋化と言われるような裏面を感じてきたのです。他文化との接触で自らの文化の特色が薄れていくのは不可避性であるにしても、鎖国と開国と一体どちらが日本にとっては良かったのか、大いなる不安を抱いたこともありました。植民地になっていなかった日本でそうですから、数百年間も英国の植民地時代の中にあつたインドなどは、どれだけ大きな変化に見舞われるのかと考えてみましたが、インドの場合はまったくそうではありませんでした。インドでの音楽文化が、なぜ今日までしっかりした伝統や体系を保ててくることができたのだろうかという深い好奇心を持ちました。

日本とインドとは、両文化の楽器の音使いは似ているのに、常に即興演奏を基礎として即興演奏の盛んであるインド音楽に対して、日本の音楽仲間たちは、「即興演奏なんてとんでもない！」という感じを持っています。それはなぜでしょうか？ 即興演奏とは、いい加減な自由空間を基にいい加減に演奏すれば、でたらめな時間を過ごすようなもので、聴く人には気持ちの良くない悪い結果をもたらすものでしょう。しかし逆に、自由ではあっても、しっかりした理念と展開方法をもった即興演奏による音楽ならば、その音による作品や気質を心にいつまでも納めておきたくなるような素晴らしい音楽経験となります。（気質のことをインド芸術論ではラサと言い、古代ギリシアの有名なエトス論よりも広範囲にわたって使われる審美的な分類大系です）

文明の柱となっている言語学・哲学・数学などの基礎を築いたインドとギリシアでは、音楽は「時間芸術」を代表するものとして、人生とよく似ているように表現されることがあります。我々自身の生存は極めて限定された時間の中にあり、いずれもその時代や環境の変化などに沿って対応しながら生き、そして最後にその人が残したものが作品となるのです。演奏ということも同じで、最後まで集中して音による作品を追求して創造する過程であり、全ての楽章が終わったとき、初めてその演奏の評価をすることが出来ると思います。「人生の曲」のなかで、大学時代とは、各主題を持ちながらも、その展開の仕方や活用する方法論を準備していく重要な時期と言えます。青春にあたる楽章でもあり、心身ともに熟する季節であるのでしょう。

結局、自分でも知りたいことですが、なぜ日本の尺八と箏でインド音楽、およびインドの声楽様式に日本の和歌？少年より愛奏の楽器ピアノで和音を特色とする古典音楽やジャズを楽しむが、ピアノなどの多くの洋楽器がインドやトルコの音楽に使えないことは自らの指・耳・理性で確認しました。洋楽の平均律による限られた音程よりはるかに多くの音が使われる音楽なのです。同様

に、和楽器による洋楽が「木に竹を接ぐ」こともすぐ感じました。比較言語学と音楽学の研究で分かったことですが、言葉にも、日本語の音韻・音節文字・母音の厳格長短の区別・文型や詩の構成などが中国や欧米の世界のもではなく、古代ギリシアや現在インドのそれぞれの言語と共通点が多くあるので、インドの歌曲形式に短歌や俳句が合うだろうと思って、試した結果として予想した程度よりよく合いました。

アジア大陸の最も「国際的音楽体系」（広く影響を及ぼして、鑑賞されている伝統）が北インドの古典音楽であり、その勉強のためにインドの最古・最大音楽大学に留学して5年間の古典声楽と笛の師範・修士取得を心がけました。奥深いインド語と技巧の難しい古典声楽の勉強だけでも追われていたが、笛の実技試験に、インド文化庁より特別許可を得てインドの横笛バーンスリーの変わりに日本の尺八を使って臨み、その発想の斬新なことで評価を博しました。太鼓タブラーの名手の家に3年間下宿したお蔭で、その楽しい楽器の手ほどきも受けられました。とにかく、恋しい妻と良い仕事を置いてインドへ出かけたので、必至に集中的な習得を目指していました。ICUのIntensive Japaneseでの苦戦が結局強味となったように、その人口二百万、複雑な社会ラクナウ市（日本の総人口をうわまわるU.P.洲の州都）にて西洋人がアジアの国際音楽にインドの言葉と音楽の学習に和楽器を加えて芸術と学問における諸接点を追求したことは、振り返ってみるとICUで重視される"liberal arts" 教育理念の典型であったかも知れません。

大学での勉強と平行して、北インド古典声楽最高権威のグルである師匠の内弟子にして頂き、言葉と音楽の環境に徹底的な経験ができました。（上記）自分の三位一对の一位であるグルをあがめる日が年二回あり、今年の7月12日がその一つですが、その三位一对への感謝を込める機会でもあります。

大学・音楽大学・大学院の在学が4ヶ国にて13年間ほど延びたが、言語に携わったことで、音楽と言葉についての論文と本を執筆する好機も与えられました。日本語で音楽書および専門誌や新聞の記事を書いたり、小説・詩集・童話集や専門分野の和英翻訳したり、そしてヒンディー語の歌詞を日本語に、日本語のうたをヒンディー語に訳したりすることが貴重な経験ともなりました。お蔭様で言葉と音楽とのどちらでも聴く場合にそのもう一方が聴こえるし、学問と芸術も表裏一体で切り離すこともできないことになっています。

13年間に渡って大学講師（4年間は教授）をしながら演奏家と日印音楽交流会（1989年創立）会長として日本およびアジア諸国と欧米での演奏会や大学での演奏・講演、インド及びパキスタンとスリランカのテレビとラジオ放送でそれぞれ全国へ、米国国際放送局VOAから数ヶ国へ、アジア音楽の共同演奏を紹介することで年々がかさなり、波乱万丈の人生が思い出満載の宝箱となります。そのなかの例をいうと、ヒマラヤの聖地にて霊に出会う、電気や水道なしにスリランカの村生活を半年楽しむ、母国のプリンストン大学にて28歳のインド人天才数学教授と共演する、巨匠ラヴィ・シャンカル師の目前で演奏させて頂く、アジア諸国の寺院や教会にて演奏と修行で音の精神力を実感するなどのことがありました。

尺八が1992年より正式にインドの楽器となっているのだが、数年前より確認してきたことでインドの音楽に最も適した楽器が箏であることは、シャンカル師および国立デリー大学音楽部の教員たちでの意見と一致します。その万能な和楽器をインドの大学や稽古場にてインド音楽の伴奏や独奏に使うアジア音楽共同開発企画としては、米国インド学会に取り上げて頂き、その18ヶ月計画が2006年7月より始まります。日印文化協定締結50周年に当たる2007年は、日印両国の首脳会談の結

果「文化・学術交流、人と人との交流強化」をする一年となるので、この企画に期待が集まりません。

日本が一世紀半も追走していた西洋文明の発展の背景にある数学、天文学、言語学や音楽学の発達文明インドが見えてくることに従ってどういう展開となるのでしょうか。これにもまた「liberal artsらしい」姿勢が役立つと思います。2003年に小生が日本外国特派員協会より文化交流賞を受与され、受賞記念演奏を頼まれたとき、得意の天竺尺八の演奏は勿論演奏する運びでした。考えてみれば、そうした演奏は日本のhardware（楽器）をインドのsoftware（旋律法・リズム法）を通じて新たなように生かすことであるとすれば、他の分野においても似た転用が可能であろうかと推定し、より普遍的にこのアジア南北共同開発関連が発表できればいいかと思いました。住まいとなっている下仁田町の名物である蒟蒻、葱、椎茸などにインドの香辛料を加えて、日本の食材とインドの味覚もその理想を生かすと思って、14種類の日印料理を考案しました。2004年2月27日の「日印文化の接点・音と味によるアジア南北交流の夕べ」は有楽町の協会にて80人の方々が集まれその発表が成功に行われました。要するに、具体的なhardwareと抽象的なsoftwareと、日本とインドのそれぞれの得意を合わせる試みが音文化で始まって、他の分野にも通用します。キリスト教において旧約聖書に形も光の無い世界が音（神の声）で始まる、ヒンドゥー教最古経典ヴェーダなどに音と聴覚の優先的な扱いが明らかなのです。無形である音と理論が形と物質の反面ですが、両面を同時に意識することは充実した発展を提供できると思います。

今年の5月に日印音楽交流会の主催企画として、インドから起源の最も古い楽器の一つであるジャラタラング（字義通り「水波」＝水が入れてある複数の磁器を半月型に並べて叩く旋律打楽器）と、ピアノの祖先となる古代ペルシアに由来するインドの打弦楽器サントール、そして世界に最も高い人気の太鼓であるインドの二個一組太鼓タブラーの演奏家を来日させ、演奏して頂きました。10日間に8つの公演などを群馬県庁、国連大学、武蔵野音楽大学などで実施しました。自分は和楽器と短歌によるインド音楽の演奏の役割もありましたが、ジャラタラングという楽器を例にすればその容器（磁器のお茶碗）とそれに注ぐ水、そしてその楽器を打って出す音、最終的な目的である聴く側のところへの効果、これらの段階の関係は次第に具体的 抽象的の進行です。

こうした具体と抽象との対象は難しい話でもないのですが、五感と理性の調整による観察・理解は幅広い勉強・経験に育成されることであり、理論的に強くない日本人には当たり前ではないし、厳格派の専門家主義者に話しが全く通じないでしょう。転回の早い21世紀にはあらゆる状況への柔軟性と多民族の人間に共感が欠かせないことと言えましょう。いわば、即興心をもって、なにが起きても遅く対応して、自分と社会に有利な参加が楽しくできることが望ましいこでしょうね。「話し好きな民族」として知られているインド人がなぜそのような性格になっているかについては、即興を楽しむ民族であること、またその背景にある言葉と音楽文化の属性が大きいです。言語体系や楽器などの音文化素材に見出される共通性が多いにも拘わらず日本人がおとなしいであること、その違いも大変面白いことです。インド笛より尺八、シタールより箏など和楽器の音色が好きな私にとっては、即興生活の特徴とする賑やかなインドの街で出会った音楽体系は即興典型となって、それを軸にした即興演奏が最高の幸せの一つとなってきました。最近演奏中に不思議に過去50年間からの恩師達より何かの様子が自分の声か楽器にはっきり聴こえてくることがあります。自分にとっては新たな驚きですが、他分野の皆様と同じく、経験と年が重ねてくる喜ばしい気持ちであり、成し遂げるにつれ「年をとる懸賞」として若い人にまだ想像もできないと思いますが、財産か名声より高価なことで、必然的に青春をなくした年寄りへの残念賞でもありますね。

今年は演奏などの創造活動に重点を置き、12年間武蔵野音楽大学で担当させて頂いた民族音楽の授業を休んでいますが、来年春学期に慶応大学の国際センターにて「アジアをきく」講座を担当させて頂くことになっています。音大に留学生が少数いましたが、今回は半々に日本人と外国人の大学院生に英語で講義できることを楽しみにしております。インド、スリランカ、タイ、英国、米国での教壇に立って教えた経験もありますが、動的に参加する学生と付き合うことは本当に楽しいです。ICUの学生にも、是非とも「質問は知識の種」であることを覚えてほしいですね。

今日に立ってみると明らかに時代が違いますが、となりにある野川公演がまだゴルフ場であった30年前の国際基督教大学と同じく現在にもliberal artsの精神を育む教育施設と経験環境である平和な学園として永遠に繁栄されることを願っております。また、そこで青春の大事な楽章を奏で上げる学生たちに期待したい気分です。それでは。。。

(日本語で寄稿)

T. M. Hoffman (1979年人文科学科卒)
演奏家(インド古典音楽と天竺尺八)・教育家
日印音楽交流会(日本事務局)
〒370-2604 群馬県甘楽郡下仁田町吉崎130
<http://shakuhachi.com/G-IJMEA.html>
日印音楽 CD「INTEGRAL ASIA」の音楽も聞けます
<http://www.yomiuri.co.jp/dy/columns/0003/inroads017.htm>
英字読売新聞「Daily Yomiuri」特集記事(日本 2006年6月1日)

2006.8

卒業生は今 [目次](#)